平將門退治圖會十

へ13
3296
10

へ13
3296
10

平將門退治圖會九

起天暦三年八月
至安和二年三月凡廿一年也

大正十年八月吉日寄贈
本大學出版部

第廿五 太政大臣忠平薨ず

附 後撰和歌集を撰む

朝に紅顔有て世路に驕りしも。夕べに白骨と成て郊原に朽ぬと。現に人の眼敢なり。一朝の露に秋一まさに風前の燈火に似たり。粤に大政大臣忠平公延喜年中右大臣に任じ。博学にして律令に通じ。同て表の位光元の他に異なり。常に用ひさせ給ひけり。この公物を奉りて。延喜格十二巻。同式十巻を撰み奏上す。今ふたつの二書世に行はるもこれを賛ずるの規とする事。実にこの公の功績に繋るなり。この年天暦三年秋八月薨じ給ふ。帝深く悲しみ給ひて。正二位を賜らまこと。信濃公に対し。貞信公と諡し給ひ。大納言源清蔭を遣はしく。

葬儀に向へせり。有難き比丘尼。霄てこの公雅きょう。畫筆好ませのひけり。
殊に憶紙の図えあり。能中杜鵑に激情を滑らせるひけり。扇に杜鵑を描きひ
けり。其扇を開く毎に声を発しきりとなん。世人のひとそ傳へる。彩に賢く在けり。
齢既に七十に近く年世紙筆のひけり。徒而主上に年。まごひと弱く在ませごに園
きり文学を好きのひ尊ら仁政を施しめ人四海一統王化に帰して後世源遠の隆盛を
称ふるに必延喜天暦この古昔に猶あるべし。未だその有難きを称し
ちなん。給ふに同てこの朝に幸つる人貴賤に励こり。関えるる人の多き
中に殊に一雙の儒林と呼えし大江の朝綱及菅原の文時なり。時主上渠に詩を個が
巧拙を試みんとて白氏文集のうち鴈を意に命じる一詩を書して討でたまれと
在ければ異りて退出。次の日各一紙をそれぞれ牀の下に捧げる。帝披きて叡覧有に
共に賞と蕭爽たり。黔南に遊ぶを送るの詩なり在ければ。帝驚歎しめひそ。卿等ぶ

胸中に分前を含せるが如しとかく感ずのひけり。其後皇孫弟に天禽。光を
覩て詩を賜しけり。朝綱が句に云く。此花非是人間種。瑕樹枝頭第二花と。
ぞ称ひけり。また文時の句云く。此花非是人間種。再養平臺一片霞と。上
の七字に二字紙差へぎ下の句共に梁園の上紙立ふ。その末紙乗り字紙用の
上。賞ふこと勝劣なり。世に一雙と称へり。理る誠とあるべきなり。加様その頃に
和歌の稍達人あり。同天年冬十月。藤原伊尹をもて和歌所の別當とし
のひ。古今集に中の古き歌。その忘れ紙集め。撰びて一の集とるべきこと紙後撰和
歌集とのへ則勅を受て撰ばしに源順。中信。紀宣。清原元輔。紀時文。坂上
望城等なり。ものく関えるる歌人なり。梨の壺に於て撰まれしべきこと紙利平の
壺の人歌紙と世ありて稱しける。世盛平に文華開けて二人より下に民に
至る迄老文雅を弄して心を慰しめ。名を後世に遺しけるこそ有ざりし聖代なり

第卅六　文珠丸殿誕生

附　経基王薨去

斯て世換り星移りて今年は天暦八年とぞ云ふけり。六孫王経基の嫡子左馬頭満仲は近江守源朝臣俊の女を聚り。夫婦の中睦まし。比翼連理のかん深らひ。偕老同穴の契り浅からざりしかど。年来を過ぐるまで出生の若君も在ますに。明暮深く歎くせのひけまども。人の及ぶべきにあらざりし。然るに満仲も年四十に満ぬれば。嫡子なるべき恢ふべきを。未だ満ぬを養ふとて。家臣を撰らべられ宮めぬひける。終に北の方唯なるぬ事とあるせのひしらべ。夫婦の歎びを喩ふるなるべし。昼累絲月を積。昼管脇教の法式守りて。産平安を祈るの外。他事あるべきにあらず。今年七月廿四日。産の気つきて安くと若君誕生ましけり。満仲常年四十三歳にして初めて男子の歎びの斜なるを。頓に嬉しく父経基王の西八條の亭へ使者を遣て云こと言ひけり。経基王は西海に武名を輝らしのひしより。諸国の受領を経のぼりて。竟に鎮守府将軍こそ。彼地に赴き在せしが。去年任限完て。今は西八條の亭に在しけるが。この若君の誕生を聞給ふ。あん歎び限りなく。直に満仲が弟に入のひ。孫孫に纏ひ。若君を自ら膝に抱き。あん顔つきぐとうち瞻て。集會する人々に対ひ。孔子人の歎ぶこと。始めて妻を娶る夫婦の如くなりとのべ。産せしと元是なる倍とのべも。今年六十二歳にして孫とのの成るを。満仲もこれ四十を超ぬ。然るに生涯ふるうくん欲。胤絶んかと自来まり心苦しく思ひ居るに時あり。孫を見ること。喩へば宮に進む荘園俸禄に預りし時の如く。尚増て嬉しくも思ふこと則ち。殊に孔子ほけさせの人情も。歎七歳の縁式も。結構善美を盡さるとて。在家の武士。ことごとく。四歳びのさに地参し。肥馬門に系に市を做し。在色の紫士へ

義時心を変じ
高明が隠謀を満
仲に告ぐ

聞傳へて。頓て歓びの使者を奉らせ。且種々の進物を送りて。門内暴れ出でたるのみと雖いへども。元うけ。終に満成に光源氏満仲の養子となる。這回文隆丸出生あるに。家督の沙汰も如何あらんと。その方々の人々危ぶ思ひさうけるに。満仲の世の人々。その信を失ふべきとて。這回男子出生あるまで。既に簡ぶ給ひ定む。故に満成をとりて婿とする。文隆丸をして次男とするまで。努々違礼あるべからざると。張り言ありけるに。満成は生質多病にて。安堵の思ひなく。満成は生質多病にて。安堵の思ひなく。丸四歳にして。卒にして。家督をとり。同人満成。一人の世に於ては。楽を喪その性をうしなふ。寒暑の性来せるが如くまで。死生の道に於て。王公貴人も通ずべし。斯て天暦十年改元あり。天徳元年と号す。同一年あり。是に文隆丸四歳にして。その冷悧なるにより。経基王も満仲の未憑しく思さるるに。殊愛大方なるに。

けり。終にその年冬の比。経基王の不例とて。打臥のひしらべその門公達に及び。在京の諸士見舞として。西八條の亭へ参る。斯てまた諸寺諸山の責僧高傳を請ぜり。種々の祈禱怠りなく。勿論典薬頭某以下。昼夜次の間に候ひて。その容態を診察す。和漢の方剤を考へ定め。田生の術を施せども。元是宣業なれば。在りけん。四年六十四歳にして。竟に空しくなりぬ。満仲と婿の公達の秋傷いかばかり。源氏の性を賜はりて。武家の棟梁と仰ぎ。ひ勇みて。猶あらば馬の蹄に比べ者なく。その美名海内に溢れ。朝家の出護と。諸人崇敬あるべし。閻王奪魂の使者。返返も術計なく。せをなのひしひしと。閻王奪魂の使者。返返も術計なく。せをなのひしひしと。閻王奪魂の使者。返返も術計なく。せをなのひしひしと。閻王奪魂の使者。返返も術計なく。せをなのひしひしと。閻王奪魂の使者。

挙て情を奉り。洛中何とゝなくうち潛まり。物の青色も関えざりけり。

第卅七　大内炎上

附　村上帝崩御

同じ年冬十月。右少辯菅原文時。封事を奉りて。青侈を禁ぜんこと。

請とゝくども。貴賤ともに美服を好みて。更に節儉に徙らざりしかば。その封事の趣の畧を挙て。粗後世の誡めとなし。将作者が愚按。その旅ひかみゝびその臆説を辨じてのち後の識者の評を後のに

按るに。この事國史畧りに矣。憲元年の條下に載せり。今本朝通紀に採ふ。

そもく文時が封事。実に聖賢の道に悖ひそ。その言最信切なり。その畧に

いへく。俗之凋衰原起者侈。不塞其源何救其俗。方今高堂連閣。貴賤共壮其居。麗服美衣貧富同寛其製。官途締交之設

窮海陸而盡珍。私門求媚之饋剪綾羅而襯器。富者傾産業。貧者失家資。傳云上之所為。人之所歸。呉王好劍客百姓多瘢瘡。楚王好細腰宮中多餓死。餓與瘢是人之所惡然尚如此。朝廷實能惡者好儉。天下誰不從其所好乎。云云

その次に官位買ふ。

とゝ。拾ぶ。ぢらんとの文。事繁けとゝ。ぢ。恩ふ文時。直練。

奉るの廉さ。紀綱章の厚めの。賞ふ隆ありとすべ。賞とも此

事周ひらさざるり。紀ふ見えさり。定保。雖て接するふ青侈を好むの亂弊の

所業。儉を好むの聖主の德なり。終るふ良もすとべ。延喜天暦ぶりて。治

道とりくの口實とて。延喜天暦の御帝とりふ。中ての青侈を嫌むの

とあるの。如何ぞ。思ふ。ふ貨を好む色を好むも百姓と共にせば善

とりてまこけん。青侈もまこと。絶和睦し。治まるふ。あらん乎。

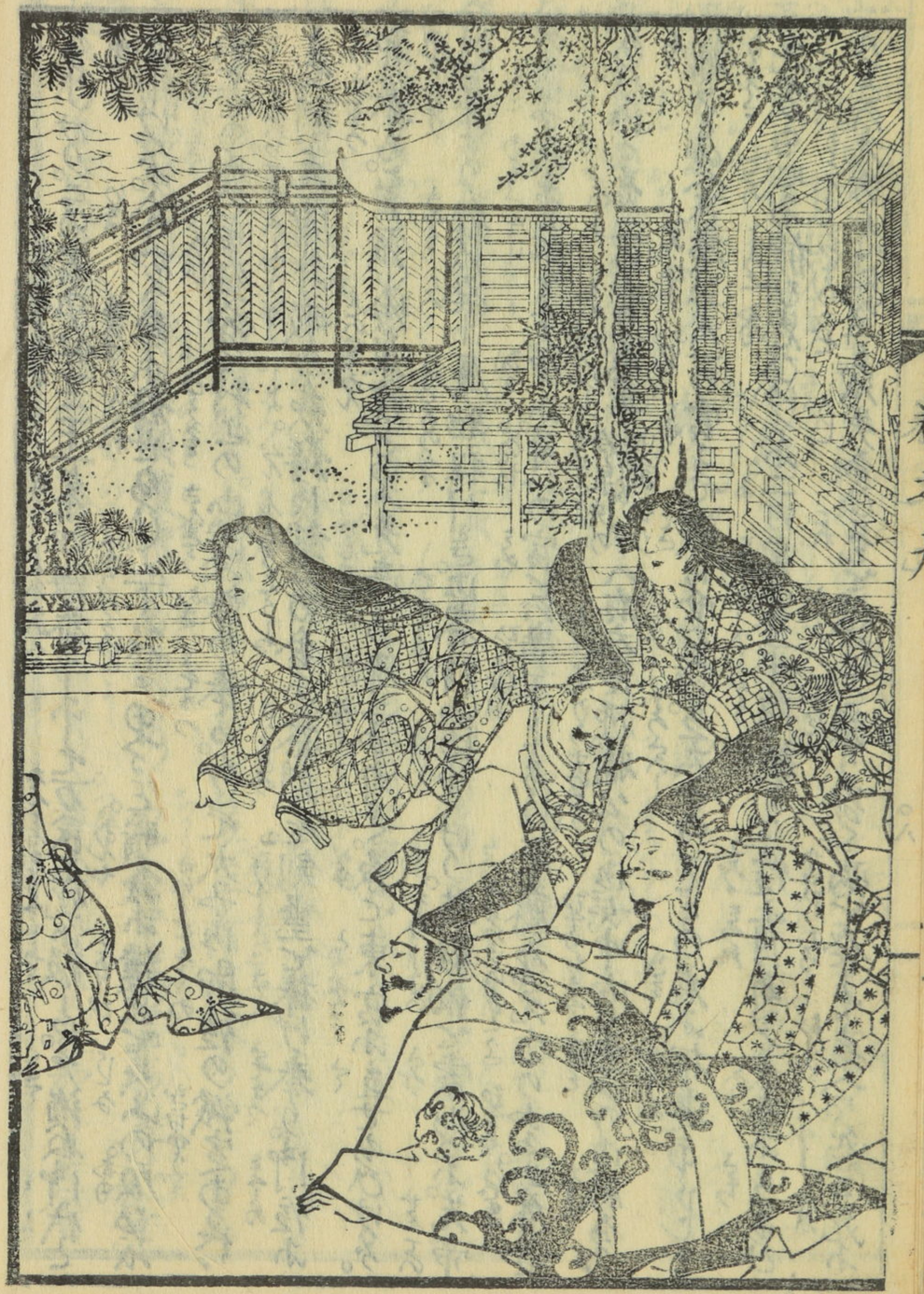
同四年九月廿三日子の刻ばかり陽門の陣より失火して、折しも比叡おろしの風烈しく、忽地炎焔十方に飛散て、皇居は火係りけるとぞ。主上は腰輿にめされ、宝殿を第一重の位箱と申す物に移し出させ給ひ、後に奉りもせず。西の下蔀前後を解き、上卿一人殿上人一人供奉、漸く大政官へ遷幸の人四五人皇后女院を始め、女官かぶと卒堵婆雅き姫宮の位乳母抱き奉りつゝ、方々に近出あへとのくどものつ習はせらるゝ事、まのあたり見聞損じて流涙の袖乾かず。或ひは吹来る除煙に咽び、或ひは眩暈倒まろんとする内侍命婦の女房たち、心を励まして前後を冊き、頻りに扶け奉らせて、主上のあと跡を慕ひ奉る。同日富士の石基崩れ、大石数多転び、賀茂の社の神殿、東門の辺に飛出て、彼処にて焼失しぬ。主上いとゞあん思きわまり、この神殿の

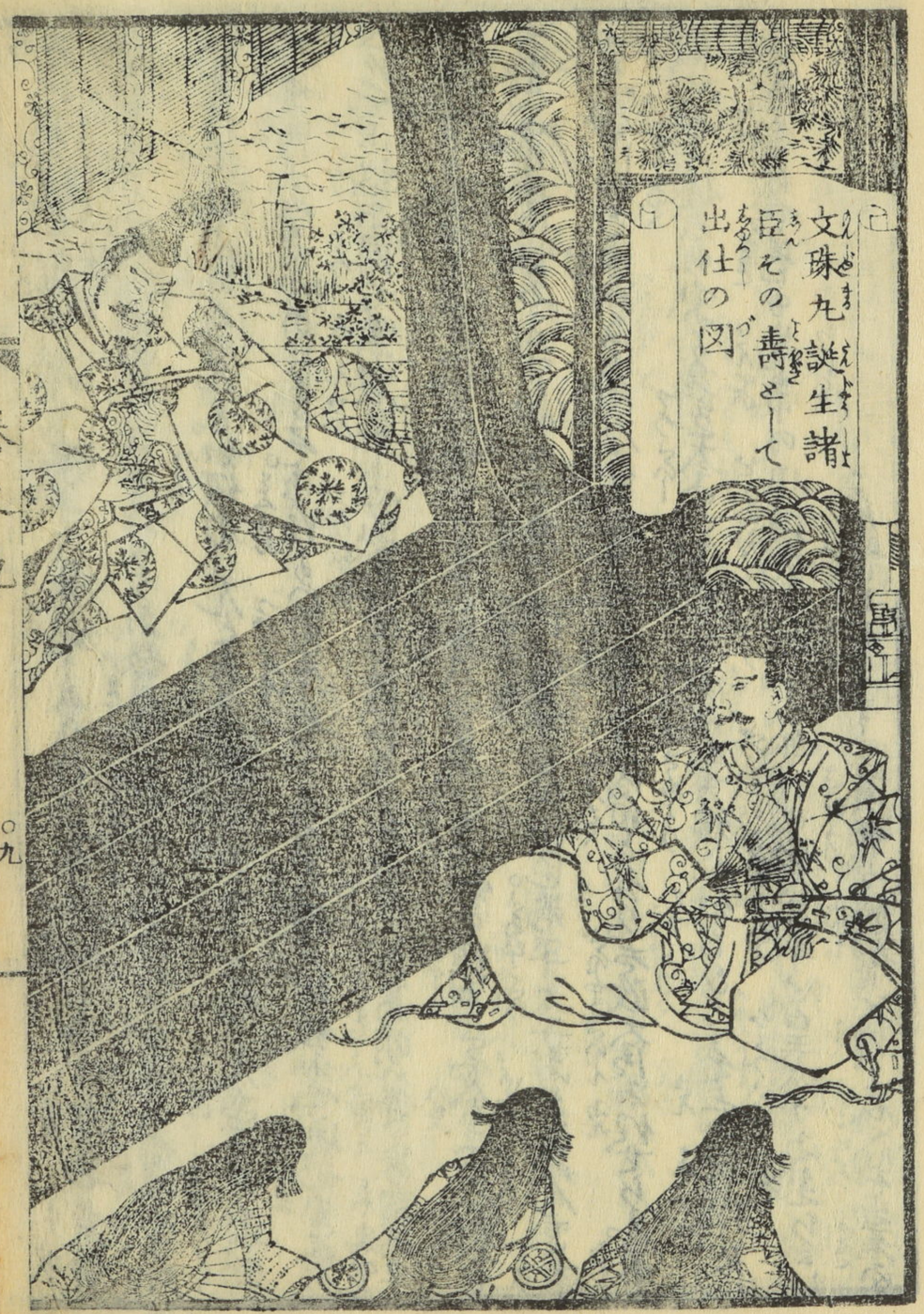
いろゝ中と見えしが、神重宝数の主上のあんず奉りて、神殿の内にて焼失せ給ふ。神殿の内の御殿、一の御殿の内にて、内侍の御殿を斗り、暫明殿の池の辺にて、えもいはぬ殿の焼失せ給ふ。仁寿殿の棟木、移り焼くこと、燃え盛る炎世にも凄まじ。この種の神宝の内、神殿の焼ぬるこそよと、漫悲しく涙を流しぬ。その内象ばかりも止めおんず奉らんとて、温明殿の焼跡を彼方此方と探し求めぬ。渦高き灰燼の中より、神鏡耀り出させ給ひ、南殿の楼の横木に掛らせ給ひ、光明顔貌と敬ひ奉る。実頼公いとゞ感涙漫々止め敢へ給はず。

失ざりけりと憑しく誓言清浄にして、昔天照大神百王守護の為にとて、榊の内に入らせ給へと祈誓を擬しの奉る。鏡の内に、ひとり空しく入らせ給へと祈誓を奉る。鏡の内に、実頼公の傷ましき遺り一条房あり。実頼公の傷ましき遺り一条房あり。榊を離れ見えぬ内侍の内に入り、則ち成色を主上の在ます大政

宮へ遷り奉らせたまふけり。情景ともに神境と内侍所とをん称へけり。桓武
平安城へ　桓武天皇の草創なり。百王不変不易の名勝第一の厳の宮居なり。
回禄の患へあることなし。数ふれば年いくばくの厳かや。聖主十二代と経年数百
九十七年に及び始て火災に罹りぬ。命数の盡る処、王威も衰へ給ふ。
故当下あるべくとぞ。斯て美濃尾張両国とりて門程造営の料に充られ。
東西の保式あり。宮城四方の十二門を始め。百司百寮の家々まで悉く
けるとぞ。応和元年冬十月冷泉院より。新造の内裏へ還幸あり。
世事あり。低而年序推移り。康保四年に及ぶけるが。主上に不豫のことあれ
より。諸卿参内して典薬頭護持の名僧ども加て盡し。祈とぞ。丹誠を
抽でらるとけれども。七珍萬宝命に買ふ由なく。竟に六月九日。かくまさに

ありけり。この君位在世二十一年。四海泰平にして万民王化に服しぬ。
称しけり。今の世に幸に稀世のひと上下衰をあつと。時節に遭ふ賢臣と奚ふの恩ひ
倣せともその甲斐なし。村上の山陵へ飲め奉る。かくて太子は即位の儀定あるべ
とぞ。則光帝升暇の夜。群臣殿芳舎に参列して。剣璽を捧げ奉り。御位に
即奉るとぞ。冷泉院とぞ。光帝の第二子にして。第一東宮にましけり。
位に奉り。程経発。屢物狂ひ。出家遁世ましけり。其仏縁を索ぬるに。光帝
の母子敦実親王の中に第一の宮ぞ。廣平とぞ。藤原元方の女に出来させ
給ひける第二の宮憲平　冷泉院の　右大臣師輔公の女中宮安子の腹なり。
給りとの人。皇太子のとこの君に相違あらじと
元方も心に歓び思ひけり。二の宮憲平隆誕ぜり。程経て月日重なり太子に立ちぬ
なるぞ。元方忽地望を失ひ。是を恨むと限りなく。病を発して憂へて。怨を死に




文珠九誕生諸
臣その壽をして
出仕の図

死けり。続て女御(元方の女)も廣平も薨逝しおはしけり。その怨魂のなす処にや。東宮憲平も常る異病に罹りおはしけるに。醫療御祈念ありけれど怠りおはしまさず。されバ王位に即おはしまさんを。如何あらんと右大臣高明公ハ云しかども。先帝の御遺勅を變改すべきにあらじとて御位に即奉れど。その御大嘗大極殿にて遂行せ給ふべきも御悩に因て紫宸殿にて遂行ハせ給ひけり。されバ右大臣高明ハ第三の宮為平へ御婿にて在しけれバ。この宮をこそと思ひつるに御遺勅の趣止がたく。今こそハ斯てもあれ常に御悩にましませバ。春の御位永くハあらじ為平太子に立せ給はんときこえしと思ひゐたるに。左大臣實頼ハ是より関白となり。太政大臣に任ぜられ。舎弟機を掌握なるによりて。太子の御事も関白實頼の計らひとして。この宮の為平を除き奉らせ。是も先帝の御遺勅と称して。第四の宮守平を皇太子に立らせ給ひ。されバ高明ハ心中に大にこれを憤り。實頼が私智を憎む心で止まず

けり。この時右大臣源高明ハ左大臣に、大納言藤原伊尹を右大臣に轉ぜられ。年号を改て安和と稱されけり。かくて左僕射高明ハ只實頼を憎むの隙の折く其黨たる故武藏守秀郷が嫡男相模介千晴ハ右府の家の良将なれど。今ハ離して世を憤り居たりしかれバ。偏倖なるをもて未だ此千晴を顕らひぬ。千晴ハ天慶の始め父と倶に東国に於て巣大なる功を顕しけれども。恩賞にも與らざれバ窃かに世を怨み世を憤る折節なれバ。俄かに忽地御味方に参りける。まづ此等の縁類とて中務少輔源連前武藏介藤原善時僧蓮茂などの入る者おほく一味同心して。まづ為平親王の命育せしぞ。諸國の兵を徴るべきや如何あらんと評定ありけれバ中務小輔源連が進み出て言すやう。抑此國の安全一天下の安危にかゝる。此大事なれバ頼るべき将を撰らひ根を深く蒂を堅めて計ひなさずハ後悔あらん。こゝに左馬頭満仲ハ世に聞えたる名将にて。その上渠が父經基ハ[illegible]

勉め。東國大名彼家の威風に恐れ服する多し。然るに南て滿仲卿まづ門方の屬
らを引き、ひとり一騎に対りつゝと。堅く対りつゝと。堅く対りつゝと。
滿仲卿朝家へ對し。忠臣の忠節を存ずるの道。怒を寂寞に聽せ備後を任
さるゝに。忠義を大事と如何あるゝんと一決せば。然るに繁盛の剛勇あれども
緩くして智慮なし。今人の異見を聞て。仁義を思ひ。ひとり全論しく思ひ。
進めて。雖とも朝家へ對し。不忠を存ずるのあるゝんや。然るに這四の人企て。
殿下の意を暴り。政事悉く邪路に陥る。板ぶた僕射あり。敵を。を通を收て
有道の君を。を奉て。穢ひ清めんと。專ずる所。朝廷のもん落めて。世民
の対策。滿仲全く忠義を存せば。然ひて。然るに渠も殿下を見負て。
一味合體せずとるゝ。活て再び能へ帰さ。そ繁盛を方すの。うちに在ることを
ゆゑ。高明なる武門實に繁盛ぐ。然るに如。悉く滅まあり。然るに滿仲卿

招きて事成就すべしとそ。その日の評議に果あり。粤に武藏の義時。私宅へ
帰りて思ふ。我この禍ひに貪む。一味合體の。元の企に國
家の廢。君の命とのふもあるまじ。殿下の權を媚を且つ婚をして帝を
登せ。系統を掌に握らんとの。貪利の軍を起し。今堂さる朝家に對ひ
矢を発ち戦を震ひ。かの卵をとり。髮を振打ちも猶危ふ所あり。如
滿仲卿を成告て國家の。を異を計らんと。自問自答の心を宮の既に臥
さり成暴に起て。頭に衣冠を搖腰ひ。滿仲卿の館へ參りける。折ふしの刻も
迫づれば。四門を堅めて臥さる成。東一くうち設き。急用あり左典廢に見參
せまく參りくうと。乱入さりしうべ。滿仲卿。
殺うめ。べでと。出のへ義時。密に言ふ。
迫羽成とさう。傍へ追遣り。藤成進め。声を低め。左僕射迫骨遠級さの

ん企みをうく在下も。既にその列に加はつつ。終に指揮する将帥なり。故に明日義経招たそのこと談ぜんと。今日の衆議一決しぬさるとも義経廉直の将頭なるを。ものゝ如繁延一人抽でゝ。義経兼ねてを於て再び鎌へ帰さんと。信義先人に言ひ合せ。左府も憑りく思さるとて。いろく変を究りて。在下熟こと義経思ふに。国家の出大事是を過ず。先非義改め君に奉て。緯静謐を計らんとて。暴に奉ひとの。満仲一件を図終り。足下の心底を測せしに朝家へ対し奉り。一廉の忠節なり。直さるべきより殿下へ言て。計らはんとの旨なれども。足下の初義を変ずるを拒ど。幸に義経の射りがく。弥に繁延の虜を。情の痛く覚ゆるに。性ぜん臆しうとのんさんも。是もまこと残念なり。兎も角も在下も。明日をさることを僥倖なる。自性を虚実義経見ぞけ。計らはんと思ふ。爾ぞ足下の思ふ初こと。自ら。その事に縛十分に謀り合せて。暁に及び

義時。已ぐ宿所へ帰りけり

第卅八 西宮殿隠謀

附 満仲義時注進

明まで二月十九日。西宮殿左府高明。より使参り。別業の接待をうく。義経机に見過さんも本意なけれども。今日は紅士文人を集会して。宴を開かんと欲す。願くは素駕あり。餘興を添へんとあり。満仲使者の趣き義経聞屈げ。何乗る面持ぬ頓て伺ひ仕るべしと。回答らと。蔵来義やうに粧ひて。回井大宅に。足回を義経と俱に。後に秘蔵ありける鬚切と。二尺七寸ありける太刀を加藤忠政に持せ。徐こと西の宮殿に入ぬ。鬚切の初編に。斯て一座を見ることしの人は中務の補繁延前相撲の千晴。武蔵の義時。義経を始めとして。左右に列座。中央の高平親王の。座あり。

に縛だろう敷で親王に在さば。満仲心に思ふ。偖いこの企親まうに。茲のこの思ひ
やりをこのあたりに人くの情て勧め奉つるのみぞやあらんずらんと。心に思ふて垂涎の
ふ頻て種くの賛辞あり。式ひに詩歌ひに歌と。顔を探り天に遠業を言て。遠慮なく
服膺て倍ー。盃順逆を嬉なぞ。頗る笑壺の舎ぞあつけ。當下左府高明信と駿
眼をーのひけをば千晴心得て。満仲が膝の傍へ進まうと。緯新ーきーるゆいへど。
武名に於ては日本に隠なーなく。天晴名双の将帥に在ーるまで。左大臣敢て命に換
えて情に思ーてをのあり。其に何に為まーと。満仲に直言の
油を注命をそこの胴ろ[illegible]の口調にも覚へず。在下飽まを朝恩に浴ー。上一人三公の
命せ。仮令何なのことりとも。背くべき理まるとも。諾で面答ーまーて高明公に満面に
歓びの色を彩ー。然らば満仲に譚ずべきことあり。迫う余れと膝近くに。特ーまー
別懇なる。抑當今の様ーとりに恍屋ゆるのよりに。位人ーるべきべ。然てのこの

宮の為平親王。皇太子に成りやと思ひの外。桐園の実我意の計らひにて。先帝の位
遺勅と称ー。四の宮守平親王をのそ。皇太子に成に於て。式部卿親王平常に
憤り深く。那思ひ当の人とあり。偏に満仲が武威を假ずんとの。位大宰果敢く
あく。緯性べーとも思ひ定ーまるが情むのこのくまで。式部卿親王のあん情をありと。
細こと命ある。満仲兼りて忽地に頓首ー。在下那別意を存ぜず。君のあん為に忠
勤を盡。偏に朝家のあん獲とあるまく歓するとの人と雖も。満仲が武威時に遺
ひそその壮なる武偏執の族猶まの位後を構へ君を欺ー言はんや。君へいーく延長
帝の。皇子まを渡らせのひ。争う越るあん企のあるべうも思ひ定ー是なく。何を
設け。満仲が心中を。試とこを存ひ。満仲苟くも清和の皇孫ひまを遠きふい
たを。争う際意を存ずんを。彼人が隠謀の。言あるを知りあるを。敢と期こを宜ひ
ー。當下中勢に捕繋延へ。かの乳母を漢すそその應答を候ひ。御とこく

相模介千晴討
手を引うけ大ホ
血戰を

傍なる欄干の木と引放し。満仲が前に立隠れ。やがて満仲乱れ入り。かゝる大事の命令を言葉たゞ右に侍て遁れんとす。兼ねて大事成聽する
うへ。その座を立すべくもなく。白眼つめて去来とのゝ。撃懸らんずる威勢に満仲
是程視てかゝるも縫がべく。扇笏を取て嗟置くし。静まりうへ中書郎（中務少輔の唐名を中書侍郎と云）
足下欄干を摧て是程撃んとす。元を非成ぶし一枉れて直に是を世に
のぞ折檻とのゝ則檻を折て撃の猶なり。遠く異朝前漢の成帝の故事
なり。丈と今と表裏なるこの内隠謀に異せずとて檻を折て殺んと足下が
挙動その意を得ぬ。さて人左僕射道理に恩しきのありとのゝ。是下が
ぞ鹿忽人を殺らひのゝ甚だ危ふし。よりや此身を撃るとも。いまだ心に愛せ
ざる。とゝやゝ異すべきと。白眼つめて在けるべく。繁延始めの愛妾に似せ。殺懸るべき
図を失ひ。是も白眼つめて。仁王立に立て踏ん張り。この上に大臣高明や。国家和げて。

繁延を制しのひ。満仲がうち射ひ殺ん。是この隠謀を企国家を奈さんとのゝ
あるべし。都への結構相図ぶ。偏執緩慢の計らひ出て。偉なる形勢を階を敷き
れ是を退けて政道を清めんと思ふの。是下が思慮後を知る。不義を糺せずとのゝ
ゝあるべし。今繁延が無忍の挙動を偏に
べんとゝあるべし。渠程を盡さんと。隠れ
能ふ。免れて者怒あるべし。何とつゝて再と再四に覗ふ。満仲始終
物とも云ず。顔を抵て在けるが。心猛に思ふ中。実に兼ねて
座を退すべくべく。為りとて座中を欲つくさんもまた対面。當座の口論喧
嘩が階を死をとも更ふその絵ゝ。よりや雑ゝくとも。渠者の雑の通
さぬ抑と。忽地軍の准備を儀を欲。さるべく遠国へ逃れんとゝ追捕せんと甚
多事。さるべくとて騒ぐ。道が異せんとのゝ心が騒ぐ。如何めて跡を

避んと黙然として在けるが。當下武藏介義時ハ滿仲が傍へ參り。在下左典厩の
御心を鑒るに。只今ハ何ゆゑ征を發する處相國を退けんと容易からず。其の御心を
斯うなしと思惟しぬ。人のするべし。然どもいまだ無道の者を放に置て誅たる例も候てゆ
ゑ夏の桀王紂を伐の類なり。またいま無道の相國を聚誅ひ遷延なる例少なからず。侍て
本朝天智の帝の昔入鹿の暴逆なるを憂ぐ。因て鎌足宮中にて是を害しあひ
玉ふ。先縱充長協入何とも思ひ煩ひ玉ハず速に領袖あり。天下を清めあんとぞ。
將帥の任あるべけれども。據て朝しるてハ是ぞ憐然なく喪しけり。滿仲も又是れに
如何にも其過ぎり。足下が異見極めてよし。然らバ左僕射の命に從ひ粉骨を
盡しめべしと。漸く納得なし又高明て指め一度の面く。滿仲兼て思ふ
於て其の謀一挙になるべし。式部卿親王十善の御位を繼給ふ事道理にあれバ。其
身に入る心地して頻て大臣の勅事なる極にも誠の意を成て一通の書状捧げけり。

左典厩の前に出く。滿仲被見して之よにとて式部卿親王爲平の令旨をぞ在しくべ。
則どもと疾く奏き譲し。遠国忠義を補ずるに於てハ東八ヶ國の豫頭に命ぜらるべし
の条も有るに於て譜代の面目何事か是に過べき。如何にも思慮して回らして不日に
計ひ給ふべし。今宵ハいとく更闌ぬ明日こそ早天て參られよと。而暇を乞ひ此処
を立退給ひけるが。良ありて義時ハ左府に對ひて言ひけり。滿仲不肖なる在下が一
言に因て思惑に屈伏なしてゆかず。いまだ心中の虛実を知らず。在下直に往ていく
丈を探りやべし。然して明日の會合の席の刻と定むべし。斯なる上ハ一刻も猶豫せ
べからず。先する則ハ人を制し。後る則ハ人に制せらると既に兵法の本文なり。
有白に出しけるとて謀計なりとハ争ふべき。左府ハ悪頭のひて。げに
と命するにぞ義時は速に退出けり。滿仲の跡を追ひ馬を跳らせて絶けるが。左典厩の
門前にて漸くに追着參らせ。其趣を祝して。猶綽も急に及びぞ。

きそん悪うろうん。今より直ち殿下獄へ参りて、あの事成就さうべしと。頼て書状引
久しく。満仲義時幼と双べく。小野宮殿獄へ参りに。如此さのよう言上しけるべ。
實頼殿へ対面す。満仲の計らひ神妙と。屋敷の功と労ひ。情忍ぶを
べたかあべ。西宮殿高明を捕奉り。然て繁延以下の侍衆と捕捕を肝要成れ
その計策に固様さと閑談数刻の及びて。頼て満仲義時に暇言して退出る。
かくて明るべ二月二十日。まづ東宮明中ぬれ。小野宮殿下より。まづ
悦び。発ーのふ閑て速ふ諸卿参内あるべきよう。雑式て以て演説あり。左府高明へ
この程より。所労と号して出仕止まり。引籠りて在ーけるが。今朝夜の刻一味の武士
と。賀茂と。宮あるべきまで。今日出仕の時人の怪びとりわあんと。前堀後の
威儀堂々として参内と遂られて。満仲が方へ如此さ申。賀茂延以下繁延
連義とのて命ぜらる。かくて高明公へ何気なく内へ参りのひけるふ。滝口の

ふる。源満仲捕源満政と。藤原保昌二人衛と。色り寄て勅使なりとの人も果び捕り
奉りて。獄に厳しく結固しる。二間ふ押籠奉る。高明公へ恐ひもよるべ。夢現も
辨へなんぞ。その分の科ならち恐と。情ふ満仲が貳心と。有ふ計らひのあるべと。
彼を怒と。紫悔して。源せる敢させの。歎き悲しとめひけり。無ふ中勢ふ捕繁
延と。清蓮義安へ大内殿の仰ふう。左典厩の館へ参りーが。既ふ縛の発覚しふ。
義ふ。ぞ知るよーるく。除くとうち通る。折ふ内ふ召出得る。田井正治藤仲光
稼て。満仲の内意と。文ける。今や遅しと待所ぞんれと躍りふ。兵二人ふ捕ふ。
心得ようと。繁延ふ侍来るあ個と。振たるひ身と沉まして。避んとする彼あ個ふ逃
さじ組着ぞ。繁延剛勇の大男ふれど。得あ個ふ敵しーがく。竟ふ捕捕れる。
是と。て蓮義ふ。逃出ると。大宅光正遣も過さじ中門の傍
めくーで。一拳ふ捕へる。斯て二人ともふ検非違使の廳ふ。殿堂と。責

問ふべしとて。頼て水火の責ゆ及ぶ。繁延始めのわざの眼を開て。一言も剛を発せず。
遂に切てありけるゆ。火責ゆ堪つく堪難さゆ。高明公の隠謀の次第悉く言伏る。此
事成就するゆ於ては。在下の捕靡に賜ふ。備運義の遠ゆ大備ゆ敬さんとの命ゆ同
て無しされど。累殺多く縛の発覚てかく紀明ゆ及ぶ。各の微運を死ゆのと。微細ゆ
言ふ。ふ。則ち状ゆ載せられく。備千晴以下の恩賞速ゆ捕へらるべしと。満仲の
命ゆる。武蔵掾満季ゆその紀命を下りける

第廿九 隠謀の族罪ゆ伏せ

附 満仲以下諸士勧賞

武蔵掾満季い即五百騎の勢を率し。前相模介千晴が弟へ。せ二せこゆ
押寄ふ。千晴いかるとも。ふ。繁延と連義が左右を。如何ゆ。ふんと後
所ゆ。やゝ門外ゆ騒しき。関の声のいえふ。備い隠謀露顕して。対面ゆと覚え

ふ。敵ふ家逆ふんとせば。敵和尊を引き率ゆん。踏止まりて死すゆ如ど。臆者ふの
て拠ふ。家隷梁田八郎い。兄三の臆ふりられば。気を呑で低徊ふ。これ逆圓の企い
漏ち朝家を覆し。傾けんとするゆ。ふ。家を真さんとのゆ。専する処へこれゆ
紛ふ貞盛一家を滅ふ。亡ふ。年の懐を晴さく。思ふ。その計らひ其故如何
とふ。天慶の戦ひゆ。粉骨を尽せしの。貞盛侯。ふ。を見をひ
繰ふ。県の。数の恩賞を得て。ふ。この。の勧賞を表ら。圓で此職を帯隠ゆ徹り
折ゆ。ふ。と思へとも。微勢ゆて。計るゆ圓ゆ。圓で遠国西宮敵ゆ。ふ。ふ。
倖。味の主領とふ。ふ。遠ゆ。ふ。違ゆ。今日対死と覚悟を做せう。你い。
落失。ふ。圓近ゆ。ふ。取り。ふ。頼。千晴。子ゆ。敬を。ふ。力を。戦。ふ。備へ。
ふ。と。絶ゆ。晴ふ。ふ。圓ゆ。圓ゆ。敬を。形を。改め。主君。亡ゆ。秋ゆ。隠ん。在下。人。阿。
と。ふ。逆れ。べき。傾ゆ。対死。と。黄泉ゆ。ん。供を。仕らん。と。勇。する。勇。ふ。ふ。ふ。晴。

まさに推入せんとす。汝、伊藤、死へ且みくに場。ぱ、二百騎の程の人。こゝまで俱み死ぬ
べし。後の計策こそ肝要なれ。加藤久頼、かゝる事も知ぬ。結ぶ所の刺客、頼朝下
らば、彼、伊藤、ゆくえ。絶まば、伊藤、ゆくえ。絶まば、伊藤、ゆくえ。
ゆすふ於て、こゝまで死ぬる所、百騎の功を立る処、と、喩せば忽地心を得て、絶まば、命を捨ひ
まつらん。是ぞ今生の思ひ出と涙をはらはらと流しけるぞ。千晴の涙ふ喰びしを。斬て捨べし。
エ、ゆくまで、これ討ぬも迫づかぬ。頼朝と偽られ、梁田八郎、藤太、情
この郎ふ、振合よ。家隷郎党三十騎人。みな物の具ふ身を堅め、弓を遅と待構えるふ
満季が軍勢ふ、先と押取巻門の声、二度あげて、義八らんとしけるを、門内ふ
漏くて、六十人、と、悦ぶ、ふ、聞きて、進ぶ、千晴が郎党らの、装束、彼外の、
既り、ふ、駆わとふ、先ふ、進ぶ、寄ふの、数、討ぬ、斬て、何時、責、
心ふ、ふ、猶、勝ふ、満仲が方ふ、副ふ、藤原仲光、て、彼、こ、情と、思ふ、

ふ、数、て、辛、忽地、裏ふの方、廻り、在家、ふ、火、て、懸ぶ、千晴が軍勢、これ、彼、
樸清、と、失ぬ、聞ふ、寄ふの、清、と、二百騎、斗り、三、ふ、義八、ふ、低、ふ、れば
千晴が郎党、敵と、猛ふ、義八、ふ、責、ふ、二十騎人、拠、並、一人も、遺、ず、討死、千
晴の太刀、接、て、前後、左右、ふ、ち、廻け、敵、数、も、討ぬ、ど、今年六十の老武
者、ふ、腕、後、ふ、力、竭、て、害せ、ぬ、と、する、処、満季、郎党、梁田八助房、竟、墓、つく
組、敵、竟、ふ、虜、ふ、ぬ、ふ、け、り。斬て、千晴が、頭、ふ、辺、藤太、郎、久頼、ふ、け、り、栗太、歌、ふ、あり。
梁田八郎が、後進、ふ、関、て、暴、ふ、防禦の備、彼、似、せ、ぬ、事、忽、ふ、ち、合期、せ、ば、折、ら、ば、
於、少、補、満政、ふ、四千騎、ふ、の、衆、て、率、て、直、ふ、辺、へ、発、向、。驀地、ふ、責、墓、ば、久頼、郎党、ふ、
下、知、て、傳、て、梁田、も、俱、ふ、力、を、副、て、ぬ、ば、彼、防、ぐ、と、厳、重、なれ、ど、も、敵、ふ、則、四千騎、ふ、ば、
い、百、騎、ふ、ぬ、ば、も、ら、ば、其、城、さ、へ、も、滅、間、ふ、く。脇、ふ、べ、く、も、見、えざれ、ど、、城、ぬ、の、会、い、忠
義、て、思、ふ、逞、会、ふ、て、在、ら、べ、百、騎、ば、一、騎、ふ、ば、も、退、ら、ば、と、。叫、き、喚、ぐ

戰へども。他の援なる勢ひなく。敵に荒毛を入習ひ。三日三夜息をも継ぎ。様々探せど
責むるかどもなく。今は矢種盡力究まつて。城兵悲しく行きつゝ近藤太郎久頼も梁
田も俱に生害して。泉下の義をぞ顯しける。寄手の頼れ打勝て勝鬨をぞ上げ。久
頼が手の貢物獲て。二月廿九日凱陣あり。猶所々に漏れ洩れる殘黨を探し求めて。
悉く誅戮の一ぬ是よりの倍同き。廿六日。西宮左兵衛高明公の罪責ぜまり。官職を剥
て。太宰の權帥に移さるべきなれば極りぬ。遠流の官人前後を圍て。都を沉む北の方。
その際に側に在けるめ。荒らかに突除て。車に乗せ門外に遣出し。大路まで
車より引降し。大下げ誡めの様。看督長げ教害の刀を抜て。宣命を含め又車に
打載せて。物見窓ざまも塞ぎ。六月の光りも見るとなし。斯て島羽に暫
河舟に移し。京の都を遥に漕ぎ出でぬ。その方様の人々もあん供奉に怪しげなる。
爰や波処に見送りて。明日に変るもん果物。心のうち推量らるゝ。悲歎に

涙に眼もくれ。漕ぎ舟の流るゝ。遠く鳴尾の澳なるぞ。やがて須磨へや着けぬらん
と。夫より日来経て。筑前の國太宰府に着き。あやしの小屋に入れ奉る。官人い
服まつりて。谷の水に吸り登る。昨日は北闕の月と。大度高殿の
搆へ。出魏めし。輕羅綾綺に身を飾りて。今日は西海の罪人とぞつく。赤土
生の小屋に夜を宿し。邂逅綾紡の衣を。
のこそ。光りかゝる。雲の上衆。
千晴僧遠義の三人。伊豆の三國へ配流せらる。同て久頼が手の貢
物門に集るに及ぶ。波の川瀬へ捨らるゝ。恁而京洛静謐に及びける。
偏に清盛が忠節によれり。あまた度忽に仮すさ公兼平天慶の乱にも亜べ。
者どもの功賞あり。摂津守に封ぜらるゝ。舎弟満政を左衛門佐に任じ。千
晴が所帯迫の國ゆ。十六百町を賜り。その弟満季に。検非違使尉に任ぜ

らる。武藏の義時は、始めこの道に異なるとはいへども。先非を改めて注進せし。大乳の夜べざるの心ばせ、義時が功めを賞として。その賞として。その實家相續の内ゐ。繁延が宅地一所をぞ賜はりける。繪まことにあはれ。面目絶倫。滿仲は國げうの下向の。准備を急ぐのひけり。

按ずるに繁延は土佐の竄すと。國史異本のうへ。あるいは佐渡とも。傳寫の誤るか。抑西宮高明公は博學の人。故典に通ず。故に報緑の文の古語を。西宮記とのひ。今猶ほ多くこれの公 圓融帝の天緑三年 赦に遭て歸京の人。國史異本のうへ。或謂。高明無二反心。實賴與滿仲謀。以誣告と見えたり。一書のこの正紙載せず。その是非を知らず。

平將門退治圖會九終

○繪本藏版目次　皇都書林　三條街　吉野屋仁兵衛

繪本平泉實記　前後十二冊
同　靈狐奇談　繪本雙忠録　十冊
義久軍談　鎌倉太平記　前後十二冊　茶店墨江草紙　九冊
寒燈夜話　小栗外傳　自初編至三編　十八冊　繪本頭勇録　十冊
繪本金花談　十二冊　自來也説話　前後　十一冊
同　彦山靈驗記　十冊　相馬將門　總殘僣語　自初編至三編　十五冊
同　金毘羅神靈記　十冊　則定仁勇傳　八冊
同　箱根靈應傳　六冊　安信仲店　輪廻物語　五冊
同　義勇傳　六冊　小野篁一代記　八十嶋影　十冊
同　孝感傳　十冊　延壽少女玉耳草紙　七冊

長柄長者鶯塚　六冊
繪本一休譚　六冊
三三間堂棟木奇傳　柳の糸　五冊
同後篇　紫　六冊
河内木綿團七稿　五冊
三竹灵驗　檀風物語　五冊
小說峯の吹雪　五冊
後本發切傳　六冊
雅八小紫　毒双の毒語　五冊
中將姫一代記　五冊
繪本浪華男　五冊
同　行狀記　七冊
笹語笈の露　六冊
一休　弦入　義本　三冊
繪本羽衣譚　六冊
新嘗奚の友　五冊
報仇親子墳　六冊
同　粹の川　五冊
孝子美談　唐琴伝　六冊
花街風俗解　三冊

繪本雪鏡談　十二冊
新編女水滸傳　六冊
同　二嶋姫　男記　十冊
繪本孝女誉　三冊
同　亀山話　十冊
同　鮠の腹帶　三冊
同　沉香亭　十冊
新撰勸進噺　五冊
小野小町一代記　六冊
廓中掃除　五冊
鏡山列女功　五冊
教訓　初篇　二篇　三篇　各十冊
後讐琴松譚　六冊
同　初篇　二篇　各二冊
同　武逸談　三冊
同　　二冊
阿波の鳴門　六冊
釋迦八相物語　合卷　九冊
源午深谷州　五冊
同　一代記　二冊